標本棚 私と BOOK

アジア・太平洋戦争と石油

元石油公団パリ、ロンドン各事務所長、理事　岩間　敏

アジア・太平洋戦争の開始から今年で八十年、既に戦後生まれの比率は八五％となった。しかし、この戦争を歴史の一事象とするのは、まだその本質が理解されていないと思われる。

アジア・太平洋戦争は日中戦争の継続戦争である。日本は米国を主とする連合国と戦争を開始する迄に四年五カ月も中国と戦い、約七十三万の兵力を派遣、十八万六千人の戦死者（含戦病等）を出していた。この戦死者数は、ベトナム戦争時の米軍の派遣兵力数八十七万四千人、戦死者（含同）五万八千人と比較すると少ない数値ではない。

この日中戦争の過程で日本は、米国、英国等が中国を援助しているとして支援物資の通過地である北部仏印、更には南部仏印の占領を決定した。

一九四一年七月上旬、御前会議で「情勢の推移に伴う帝国国策要綱」が承認された。

要綱の趣旨は既に継続している日中戦争に加え、資源確保のために南方に進出し、状況が許せばソ連を攻撃するというものであった。要綱は、日本の最大の国家機密であったが、決定から六日後に外務省が米国、独、ソ連の駐在大使宛に打った外交電報を暗号解読された。ソ連は日本在のスパイ、ゾルゲを通じて情報を入手した。米国政府内では対日制裁の検討が慎重に行われた。

米国務省は在米日本資金の凍結、生糸他、日本製品の輸入禁止・制限、対日石油輸出を平常の量に、輸出揮発油・潤滑油の等級を落とすこと等の準備始めた。

七月下旬、日本軍が南部仏印に進駐すると、米国は日本資産を凍結し、英国、蘭印（現インドネシア）もこれに続いた。石油輸入量の最大は一九三七年約六百十万kℓ、需要量五百二十万kℓ（輸入増量分は備蓄）、うち国産量三十万kℓで、輸入量の七割強は米国からであった。

米国からの輸入量が八月一日以降、完全に停止した。この時、石油備蓄は約七百七十万kℓ、一九三七年～一九四〇年の平均石油需要量約四百二十五万kℓ、自給は二年弱あった。これが大本営を開戦へ走らせた。

本書では、石油獲得のために東南アジアへ進出した日本軍の行動と、その後の日本の石油事情を中心に、アジア太平洋戦争の実態を述べる。

岩間敏：1946年鳥取県生まれ。早稲田大学学法学部卒業、日本経済新聞社、トヨタ自販研究所の後、石油公団に入り通商産業省調査員、ハーバード大学客員研究員、石油公団パリ、ロンドン各事務所長、理事等を歴任。2016年一橋大学社会学研究科修士、博士課程修了。社会学博士。

スクープの裏側

中央公論新社 取締役・書籍編集局長　三木　哲男

雑誌の命は昔も今もスクープです。最近はスマホに読者を奪われ往年の勢いはないものの、大スクープが載ればみんなが書店に走ります。

私は「婦人公論」の編集長を七年半務めました。編集長生活のなかで最も情熱を注ぎ、神経を使ったのがスクープ取材です。

なにより、時間もかかるし、お金もかかる。場合によっては訴訟リスクにも備えなければなりません。加えてスクープのとれる編集者・記者は限られています。文春砲で名を轟かせた新谷編集長が「スクープは取ると決めないと絶対にとれない。あとは粘りと覚悟に尽きる」と言っていますが、その通り。骨の折れる仕事なのです。

超がつくほどの人気アイドルのスキャンダルを追ったときは、掲載までに半年近くかかりました。夫婦仲が破綻し不倫に走ったという、よくある話でしたが、世の中の報道はアイドルへの非難一色でした。ところが周辺を取材してみると、アイドルだけが一方的に悪いわけではない。夫のDVも調べるうちにわかってきました。

取材を申し込んだものの、スキャンダル報道に怯えたアイドルは頑として応じてくれません。いろんなつてを辿るうちに、彼女の母親が話したがっていることがわかりました。母親と会って話すうちに、母親のほうからぜひ娘の話を聞いてほしいとなり、ようやく取材にこぎつけることができたのです。

彼女が一番傷ついたのは、関係者のコメントでした。

「心配しているよと電話をくれた友人が、実は辛辣なコメントを週刊誌にしていて、それで人間不信に陥ってしまいました」

スキャンダルの渦中にいる芸能人は、名前を伏せた関係者のコメントが誰であるか、ほぼわかると言います。だからもう何も言いたくない。その一方で本当のことを知ってほしい、という葛藤の中で揺れ動くわけです。それでも思い切って話してくれるケースは一割ほどでしょうか。

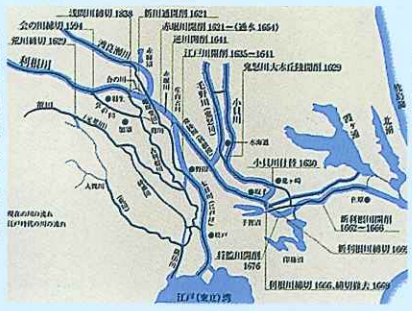
SNS全盛のいま、メディアの厳しい取材を受けるよりも、自身のブログで心境を告白するケースが増えてきました。もちろん自分にとって都合の悪い話は出てきません。白一色の話を喜ぶのはファンだけです。陰影があってこそ告白は力を持ちます。打率一割のスクープを追う意味はそこにあります。とはいえ、徒労感が九割。果たして割に合っているのかどうか。悩ましいところです。

江戸城築城の秘話（その十）

利根川の流れを変えた東遷事業とは

江戸歴史文化研究員　窪田　孝

文禄三年（一五九四年）から行われた利根川の「会の川」（あいのかわ）の締切り工事から、承応三年（一六五四年）の赤堀川通水工事にかけて、六十年にわたり、利根川の流れをかえる東遷事業が始まった。



幕府による数次にわたる段階的瀬替え工事は、江戸の街の構築、都市つくりのための大事業であった。

目的は、

①洪水・水害から江戸を守ること、
②新田の開発を推進すること、
③舟運を開いて東北、関東との交通・輸送体系を確立すること、
④東北の雄、伊達家に対する防備を強化すること、

などのためであった。

都市つくりのための、舟運、新田開発の目的が強かったと思われる。

江戸湾に注がれていた利根川の流れを、多くの台地を切り通し、大小の川や湖沼を結びつけ、銚子に通して太平洋へ導くものであった。

江戸湾に注がれていた流れは、人の手により、江戸時代から少しずつ、流れを東に変える工事が行われてきた。

江戸の発展に大きく貢献する川として、わが国最大の流域面積をほこる利根川が誕生し、現在もなお治水工事が行われている。

一方、利根川の地下水脈は依然として江戸湾に注がれ、長い間の浄化作用により、江戸湾は再生し、豊富な漁場としての命脈が保たれたのである。

会の川締切り跡

羽音

のり鉄・とり鉄・のみ鉄（その四）

三井化学アグロ（株）元代表取締役社長　谷　和功

もう一つの黒部ライン

新型コロナで、鉄道ファンも苦難を強いられており、特に「飲み鉄」が出来ません。

鉄道車両も含めて、消毒にあたっておられる方々に感謝申し上げます。

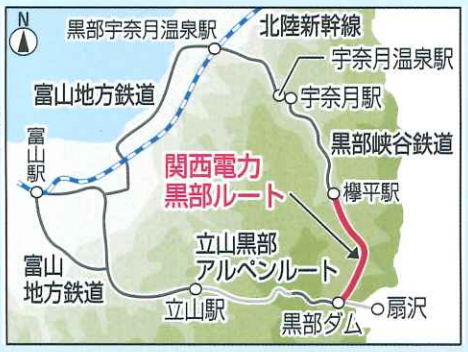
立山黒部アルペンルートや黒部渓谷鉄道は、皆さんよくご存知だと思います。

前者は、「レイルウェイズ」第二作の舞台である富山地方鉄道の立山駅から、ケーブルカー、高原バス、トロリーバス、ロープウェイ、電気バスといった多様な乗物で、立山や黒部ダムを訪れるルートです。春は雪の大谷、夏の登山、秋の紅葉など、雄大な景色が楽しめます。

後者は、宇奈月温泉～欅平の線路幅七百六十二ミリという狭軌のトロッコ列車で、黒部川の渓谷美が楽しめます。

特に秋の紅葉は見事です。

両ルート共、すばらしい温泉もあります。



もう一つの黒部ラインとは、この二つを結ぶ欅平～黒部ダム間のルートです。

三つのルートは、「黒部の太陽」などで有名な黒部の電源開発のために建設されたものが始まりです。

黒部渓谷鉄道の本線部分は、「生命の保証はしない」便乗の形で始まった一般客の輸送が観光鉄道化しましたが、欅平～黒部ダム間は関西電力専用の輸送ルートとなっています。

ただし、関西電力が開催する見学会に参加すると、このルートが踏破できます。（倍率高い！現在は新型コロナで休止中）

トロッコ列車～竪坑エレベーター～上部専用鉄道～インクライン～黒部トンネルバスと乗り継ぎますが、ほぼ全線トンネルで、わずかな開口部からの剣岳と三ノ窓雪渓（氷河）、黒部川の流れが絶景です。

ハイライトは地下にある黒部川第四発電所までの上部専用鉄道で、「高熱隧道」を通るための耐熱車両をバッテリー機関車が引いてゆきます。紅白歌合戦で中島みゆきが「地上の星」の歌詞を間違えた有名地点も訪問できます。

最近、この黒部ルートの一般開放が、二〇二四年から実施されることが公表され、もうすぐ誰でも行けるようになります。

上部専用鉄道（中島みゆきが歌ったあたり）

むしくいず

（問題）　下の文章は何と読むでしょう？

ぎ　き　た　む　く

ヒント　あいうえお順

答え＿＿＿＿＿＿＿＿

◆応募規定　ハガキまたはファクシミリで、答え、住所、氏名、当社との関係を明記の上、ご応募ください。
〒105-0014　東京都港区芝２の23の４
アペックス産業㈱内　ＡＰＥＸ ＣＬＵＢ宛
ファクシミリ番号　03-3455-6558
令和４年２月末日（当日消印有効）
正解者の中から抽選で若干名様に記念品を差し上げます。

★前号の正解と当選者（順不同）
正解は『初夏・書家』でした。
今回の当選者は、栗岩昌子、西村憲、浜本明美の三名様。

触覚 BOOK

きっと誰かに教えたくなる「蚊学入門」

編集者：一盛和世
執筆者：谷川力、茂木眞司、沢辺京子、皆川恵子、忽那賢志、大滝倫子、他20名

緑書房Ｂ６版、256頁
定価　1,800円（税別）

長崎大学の一盛和世客員教授が刊行した蚊に関する入門書です。「どんな蚊がいるの？」「蚊のからだはどうなっているの？」「蚊の一生は？」「ボウフラはどこから発生するの？」「蚊は一億年以上前から出現していた？」「どうやって血を吸うの？」「どんな血が好き？」「なぜ高層階に来られるの？」「蚊柱は婚活パーティーなの？」「羽音でラブソング？」「どうやって蚊から身を守る？」「クレオパトラも平清盛もマラリアにかかった！」など、蚊に関する専門知識や面白話が満載。他にも「蚊の折り紙」「蚊の書道」「蚊の歌」「蚊のオブジェ」など、まさに誰かに教えたくなる蚊学入門です。

各章を「蚊」というキーワードでつながった多くの専門家や関係者が執筆を担当。ユニークな本に仕上がっています。

本書を読破すれば、もうあなたも蚊の知識人の仲間入り。但し、読み進めるうちに体中が蚊に刺されたように痒くなっても、それは自己責任です。